

森園遺跡 5  
天神田遺跡 2  
御笠の森遺跡 8

大野城市文化財調査報告書 第185集

2021

大野城市教育委員会

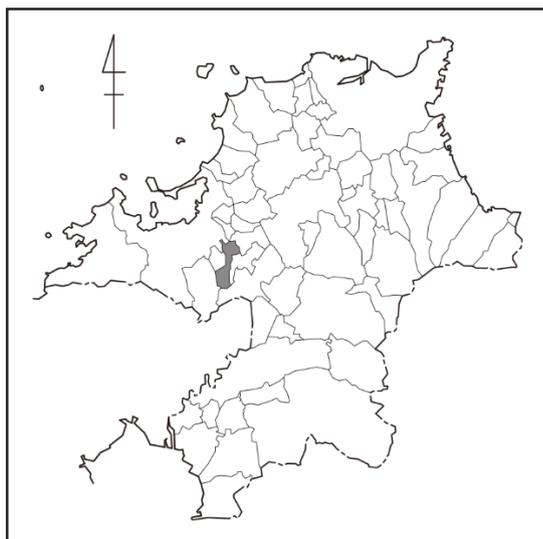


もり ぞの い せき  
森園遺跡 5

てん じん だ い せき  
天神田遺跡 2

みかさ もり い せき  
御笠の森遺跡 8

大野城市文化財調査報告書 第185集





# 序

福岡県大野城市は福岡平野の南部に位置し、その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来します。市域は中央部がくびれ、南北に細長い形をしていますが、北部に大野城跡、中央部に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡と、それぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財を擁する歴史豊かな街です。

本書で報告するのは、3件の個人の住宅建築に伴う調査報告で、いずれも調査面積は小規模でしたが、それぞれ成果を上げています。森園遺跡は乙金山の山麓に位置する遺跡で、これまで8次にわたる調査を実施し、本市では希少な弥生時代の墓地をはじめ、古墳時代の住居跡などが見つかっています。今回の9・10次調査は遺跡の南東部で行いましたが、弥生時代のピットを検出し、遺跡の広がりを確認することができました。また、御笠の森遺跡は森園遺跡とは御笠川を挟んで対岸の沖積平地に広がる遺跡で、神功皇后伝説にまつわる「御笠の森」周辺に広がる集落遺跡です。これまで18次に及ぶ調査が行われ、山田村の前身と考えられる中・近世の集落跡が見つかっています。今回の調査は遺跡の東辺部で行ったもので、ここでも中世の土坑などが見つかり、中世山田村の広がりを確認できました。さらに天神田遺跡は2度目の調査で、前回の調査では瓦器焼成遺構が見つかっていますが、今回の調査では瓦器生産の後も周辺の土地利用がされていることが分かりました。

このように、小規模の調査でも本市の歴史を知る手掛かりが見つかっていますので、今後も発掘調査を進め、本市の歴史解明に努めてまいりたいと思います。

本書が学術研究はもとより、広く一般に周知され、考古学の深化や地域史の解明等に活用され、文化財愛護の精神を醸成する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査および報告書作成・刊行にあたり、ご理解ご協力いただいた地権者の皆様をはじめ、関係者各位に厚くお礼申し上げます。

令和3年3月31日

大野城市教育委員会  
教育長 吉富 修

# 例 言

1. 本書は、森園遺跡第9次調査、森園遺跡第10次調査、天神田遺跡第2次調査、御笠の森遺跡第19次調査を併せた発掘調査報告書である。
2. 調査はいずれも個人住宅建築に伴う事前の発掘調査として実施したもので、大野城市教育委員会が調査主体となり、国庫補助事業として実施した。
3. 発掘調査は森園遺跡を三浦萌・澤田康夫、天神田遺跡を山元瞭平、御笠の森遺跡を木原堯がそれぞれ担当した。
4. 本書に使用する実測図は、遺構を各調査担当者及び柴田剛が作成し、遺物実測図の作成及び製図は以下のとおりである。
  - ・森園遺跡；小嶋のり子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江（製図）小嶋
  - ・天神田遺跡；古賀栄子、白井、津田、仲村、氷室、松本（製図）小嶋
  - ・御笠の森遺跡；小畑貴子、古賀、篠田千恵子、津田（製図）小畑、篠田
5. 本書で使用する写真は遺構写真を各担当者が撮影したものを、遺物写真は写測エンジニアリング(株)に委託し、牛嶋 茂が撮影したものを使用した。
6. 本書の遺構平面図中の方位は、座標北を表し、座標は国土座標系（第Ⅱ系）を使用している。但し、森園遺跡は磁北を示す。
7. 本書の遺跡分布図は国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』を使用し、近隣の遺跡包蔵地分布図を参考に作成した。
8. 本書の各遺跡の執筆・編集は各担当者、取り纏め編集を澤田が行った。
9. 本書掲載の遺物・実測図・写真は、大野城市教育委員会で保管している。

# 本文目次

I. はじめに	1
II. 周辺の遺跡分布と歴史的環境	2
III. 森園遺跡第9・10次調査	
1. はじめに	7
2. 第9次調査の成果	
(1) 調査の概要	10
(2) 遺構と遺物	10
3. 第10次調査の成果	
(1) 調査の概要	12
(2) 遺構と遺物	12
4. まとめ	12
IV. 天神田遺跡第2次調査	
1. はじめに	13
2. 調査の成果	
(1) 調査の概要	14
(2) 遺構と遺物	14
3. まとめ	16
V. 御笠の森遺跡第19次調査	
1. はじめに	17
2. 調査の成果	
(1) 調査の概要	19
(2) 遺構と遺物	19
3. まとめ	22

## 図 版

# 図版目次

図版 1	森園遺跡 9 次調査全景、10 次調査全景
図版 2	森園遺跡 9・10 次調査出土遺物
図版 3	天神田遺跡調査前全景（北東から）、調査区東側全景（南西から）
図版 4	天神田遺跡調査区西側全景（南西から）、SX01 完掘状況（北東から）
図版 5	天神田遺跡出土遺物
図版 6	御笠の森遺跡調査区全景（北から）、調査区全景（南から）
図版 7	御笠の森遺跡 SK01、SK02、SP02 完掘状況
図版 8	御笠の森遺跡出土遺物

# 挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図（1/25,000）	3・4
第 2 図	森園遺跡 9・10 次調査位置図	7
第 3 図	森園遺跡調査箇所図（1/2,500）	8
第 4 図	森園遺跡第 9 次調査遺構配置図（1/80）	10
第 5 図	森園遺跡第 9 次調査出土遺物実測図（1/3）	11
第 6 図	森園遺跡第 10 次調査遺構配置図（1/80）	12
第 7 図	森園遺跡第 10 次調査出土遺物実測図（1/3）	12
第 8 図	天神田遺跡調査位置図（1/2,000）	13
第 9 図	天神田遺跡調査区南壁土層図（1/80）	14
第 10 図	天神田遺跡遺構配置図（1/100）	14
第 11 図	天神田遺跡 SX01 実測図（1/40）	15
第 12 図	天神田遺跡 SX01 出土遺物実測図（1/3）	15
第 13 図	天神田遺跡 SK04 実測図（1/40）	15
第 14 図	天神田遺跡 SK04 出土遺物実測図（1/3）	16
第 15 図	天神田遺跡その他の出土遺物実測図（1/3）	16
第 16 図	御笠の森遺跡調査位置図（1/5,000）	17
第 17 図	御笠の森遺跡遺構配置図（1/80）	19
第 18 図	御笠の森遺跡 SK01 実測図（1/40）	20
第 19 図	御笠の森遺跡 SK02 実測図（1/40）	20
第 20 図	御笠の森遺跡 SK01・02 出土遺物実測図（1/3）	20
第 21 図	御笠の森遺跡ピット出土遺物実測図（1/3）	21

# 表目次

第 1 表	森園遺跡調査地一覧	9
第 2 表	御笠の森遺跡調査地一覧	18

# I. はじめに

## 1. 調査の組織

本書所収の発掘調査（平成30・31年度）及び整理作業（令和2年度）にかかる調査体制は以下のとおりである。

### 平成30・31年度（現場調査）

教育長	吉富 修
教育部長	平田 哲也
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	佐藤 智郁、林 潤也、徳本 洋一（30年度）、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任技師	上田 龍児（30年度）
主任主事	秋穂 敏明
技師	山元 瞭平
主事（任期付）	柴田 剛（30年度）、坂井 貴志（30年度）
嘱託（調査）	澤田 康夫、三浦 萌（30年度）、木原 堯
嘱託（庶務）	呉羽 京子（30年度）、西村 友美、永松 綾子（31年度）

### 令和2年度（整理作業）

教育長	吉富 修
教育部長	日野 和弘
ふるさと文化財課長	石木 秀啓
係長	佐藤 智郁、林 潤也、上田 龍児
主査	徳本 洋一
主任主事	秋穂 敏明
技師	山元 瞭平、齋藤 明日香
会計年度職員（調査）	澤田 康夫、木原 堯
会計年度職員（庶務）	西村 友美、三好 りさ
会計年度職員（整理作業員）	小畑 貴子、小嶋 のり子、古賀 栄子、白井 典子、 篠田 千恵子、津田 りえ、仲村 美幸、氷室 優、松本 友里江

### 発掘作業員

杉森宏治、田代 薫、岩石いづみ、大津幸男、梶原久美子、平江信子、安部芳範、香野博通、佐藤寛行、仁田幸男、武藤マリ子、有水智晴、下田和弘、井上光江、大浦旗江、倉住孝枝、篠崎繁美、田中悦子、田野和代、東島真弓、宮原ゆかり、安里由利子（順不同）

## Ⅱ. 周辺の遺跡分布と歴史的環境

大野城市は南北に細長く、中央部がくびれる鼓形をしており、北部には四王寺山山塊とそこから南西に派生する低丘陵群、南部には牛頸山山塊とそこから派生する低丘陵群があり、両者に挟まれる中央部は御笠川による沖積地及び氾濫原の低地をなしている。南部の牛頸山は脊振山系の一角をなし、地盤は早良型花崗岩で、表層はその風化土である真砂土が覆う。この牛頸山から派生する牛頸川は北流し、市役所近くで御笠川と合流するが、この両河川に挟まれた一帯は沖積平野が形成される。森園遺跡は乙金山・四王寺山から西へ緩やかに下り、平野との接点の低丘陵上に位置する。天神田遺跡は牛頸山から北へ延び、牛頸川や派生する中小の河川により解析の進んだ低丘陵の平野を望める丘陵先端部に位置する。また、御笠の森遺跡は御笠川による沖積平野の三角州や氾濫原堆積層を基盤とする微高地に立地する。

このような地理的・地質的環境の下で本市では、旧石器時代以降さまざまな歴史が営まれ、痕跡が遺跡として地中に残されてきた。以下通史的にその概略について述べる。

まず、旧石器・縄文時代の遺跡は少ないが、釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など丘陵上の遺跡ではナイフ形石器、細石刃などの遺物が出土している。縄文時代になると、草創期の遺構・遺物は確認されていないが、早期では釜蓋原遺跡、雉子ヶ尾遺跡、本堂遺跡等の丘陵上や石勺遺跡など沖積平野の微高地にも押型文土器や石鎌が出土している。前・中期になると遺跡は激減し、周辺地域で散見するだけで、本市では遺構が確認されていない。後・晩期になると牛頸塚原遺跡、牛頸日ノ浦遺跡で竪穴住居、土坑が確認されている。この他、村下遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、古野遺跡、善一田遺跡では早期から晩期にかけての遺物が出土している他、薬師の森遺跡、石勺遺跡では多数の落とし穴遺構が検出されており、丘陵上、沖積平地問わず遺跡が展開している。

弥生時代になると、市域でも遺跡の数は増加する。前期の遺跡は市域の北部に多く、御陵前ノ椽遺跡、中・寺尾遺跡、塚口遺跡で木棺墓・甕棺墓等の墳墓遺跡が営まれる。市域南部においても牛頸日ノ浦で前期の墳墓遺構がある。集落では御陵遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡で早期～前期の遺構・遺物が出土している他、仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など前期末ごろに出現し中期まで継続する遺跡もある。中期になると、平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が中期を通じて継続し、丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で集落が展開し、南部でも本堂遺跡で集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や森園遺跡で中期後半を中心とした甕棺墓群が営まれる。後期になると仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などの他、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡・青銅器鋳型などが出土しており、拠点的な集落となっている。周辺では中期以降春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、所謂、「奴国」の中心的な地域と位置づけられている。

古墳時代になると、福岡平野でも前方後円墳が築造され始め、那珂川流域を中心に首長墓級の墳墓が展開する。流域最古級の前方後円墳として、那珂八幡古墳がある。これに後続する盟主墳とし



1. 大野城跡
2. 水城跡
3. 岩長浦古墳群
4. 観音浦古墳群
5. 正龍古墳群
6. 湯涌古墳群
7. 花ノ木古墳群
8. 内野谷古墳群
9. 桜ヶ丘古墳群
10. 七曲古墳群
11. 金剛山古墳群
12. 持田ヶ浦古墳群 A 群
13. 持田ヶ浦古墳群 B 群
14. 持田ヶ浦古墳群 C 群
15. 持田ヶ浦古墳群 D 群
16. 持田ヶ浦古墳群 E 群
17. 持田ヶ浦古墳群 F 群
18. 今里不動古墳
19. 堤ヶ浦古墳群
20. 影ヶ浦古墳群
21. 丸山古墳
22. 金隈遺跡群
23. 立花寺遺跡群
24. 立花寺 B 遺跡群
25. 井相田 D 遺跡群
26. 井相田 C 遺跡群
27. 板付遺跡
28. 高畑遺跡
29. 麦野 A 遺跡
30. 麦野 B 遺跡
31. 麦野 C 遺跡
32. 南八幡遺跡群
33. 雑餉隈遺跡群
34. 三筑遺跡
35. 笹原遺跡群
36. 諸岡 B 遺跡
37. 諸岡 A 遺跡
38. 比恵・那珂遺跡群
39. 五十川遺跡群
40. 井尻 B 遺跡
41. 井尻 B-1 号墳
42. 寺島遺跡
43. 笠按遺跡
44. 弥永原遺跡群
45. 成屋形遺跡群
46. 成屋形古墳群
47. 裏ノ田窯跡
48. 裏ノ田古墳
49. 裏ノ田遺跡
50. 陣の尾遺跡群・古墳群
51. 筑前国分尼寺跡
52. 国分松本遺跡
53. 筑前国分寺跡
54. 国分瓦窯跡
55. 御笠団印出土地
56. 大宰府政庁跡
57. 松倉瓦窯跡
58. 松本瓦窯跡
59. 米木瓦窯跡・古墳群
60. 米木北瓦窯跡
61. 都府楼北瓦窯跡
62. 神ノ前窯跡
63. 唐山遺跡群・古墳群
64. 盗原古墳群
65. 唐山遺跡
66. 御陵遺跡群・古墳群
67. 御陵脇遺跡
68. 塚口遺跡
69. 御陵前ノ椽遺跡
70. 善一田遺跡・古墳群
71. 王城山遺跡・古墳群
72. 古野遺跡・古墳群
73. 原口遺跡・古墳群
74. 乙金窯跡
75. 此岡古墳群
76. 松葉園遺跡
77. 森園遺跡
78. ヒケシマ遺跡
79. 中ノ寺尾遺跡
80. 薬師の森遺跡
81. 銀山遺跡
82. 原門遺跡
83. 雉子ヶ尾遺跡
84. 雉子ヶ尾窯跡
85. 雉子ヶ尾古墳
86. 釜蓋原古墳群
87. 笹原古墳
88. 金山遺跡
89. 釜蓋原遺跡
90. 仲島遺跡
91. 仲島本間尺遺跡
92. 川原遺跡
93. 御笠の森遺跡
94. 宝松遺跡
95. 村下遺跡
96. 雑餉隈遺跡
97. 石ノ遺跡
98. 原ノ畑遺跡
99. 後原遺跡
100. 御供田遺跡
101. 瑞穂遺跡
102. 国分田遺跡
103. ハザコ遺跡
104. 谷川遺跡
105. 出口遺跡・窯跡
106. 上園遺跡
107. 本堂遺跡群
108. 梅頭遺跡・窯跡
109. 駿河 A 遺跡
110. 駿河 B 遺跡
111. 駿河 D 遺跡
112. 駿河 E 遺跡
113. 原ノ口遺跡
114. 先ノ原 B 遺跡
115. 立石遺跡
116. 須玖岡本遺跡
117. 須玖坂本 B 遺跡
118. 須玖五反田遺跡
119. 須玖水田遺跡
120. 須玖花尾町遺跡
121. 上平田・天田遺跡
122. 赤井手遺跡
123. 竹ヶ本遺跡
124. 伯支社遺跡
125. 大南 B 遺跡
126. 宮ノ下遺跡
127. 大南遺跡
128. 大谷遺跡
129. 御陵遺跡群・古墳群
130. 野藤 1 号墳
131. 下白水大塚古墳
132. 日押塚古墳
133. 辻田遺跡
134. 門田遺跡
135. 天神の木遺跡
136. 天神山水城跡
137. ウトグチ遺跡群
138. 大土居水城跡
139. 小倉水城跡
140. 大牟田窯跡
141. 惣利窯跡群
142. 惣利遺跡
143. 惣利北遺跡
144. 惣利西遺跡
145. 惣利東遺跡
146. 春日水城跡
147. 向谷北遺跡
148. 向谷西遺跡
149. 向谷遺跡
150. 向谷古墳群
151. 向谷南遺跡
152. 春日平田北遺跡
153. 春日平田遺跡
154. 九州大学筑紫キャンパス遺跡群
155. 先ノ原・春日公園内遺跡

第 1 図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



て、安徳大塚古墳、卯内尺古墳が系譜を追える。市域において首長墓級の前方後円墳は認められないが、御陵古墳群周辺からは三角縁神獸鏡の出土が伝えられ、古墳時代初期の有力者の存在を窺わせる。この時期の集落遺跡としては仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代の後期から継続し、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡、森園遺跡や本堂遺跡等で集落の形成が認められる。中期になると初期横穴式石室を採用した老司古墳が造られ、流域でも中規模の前方後円墳や円墳が散見される。市域では5世紀前半の30m級の円墳である笹原古墳があり、帆立貝式の成屋形古墳（5世紀後半）とともに御笠川流域の盟主的な勢力の存在を示す。また、この時期には初期の横穴式石室を主体部とする塚原古墳群、古野古墳群等の古式群集墳が営まれるが、遺跡数としては少ない。集落遺跡は石勺遺跡が弥生終末から継続して営まれ、村下遺跡など初期のカマドや朝鮮半島系の軟質土器が出土しており、この他、中・寺尾遺跡、森園遺跡、上園遺跡、仲島遺跡などで散発的に認められる。後期になると、6世紀中頃の東光寺剣塚古墳、日拝塚古墳が造られるが、以降盟主的な前方後円墳は造られなくなる。これに代り6世紀後半以降、平野部を囲む一帯の丘陵部には径10m前後の小円墳を主体とする群集墳が爆発的に増加する。いまだ、小規模な前方後円墳は幾つか造られるが、いずれも群の中に取り込まれる。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が展開する。持田ヶ浦古墳群、善一田古墳群、王城山古墳群等があり、市域南部では須恵器工人たちの墓と考えられる牛頸中通古墳群、後田古墳群、小田浦古墳群などがあり、珍しい例として、梅頭窯跡では須恵器窯を転用した墳墓が見ついている。これらの群集墳は6世紀後半から7世紀にかけて造営され、8世紀代まで追葬を行うものもある。一方、この時期の集落遺跡は6世紀中頃以降増加する。仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡等が弥生時代から継続して営まれる他、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡等が新たに出現する。乙金山山麓では、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡など、6世紀中頃前後の短期間に小規模な集落が出現するが、中でも、薬師の森遺跡は朝鮮半島系資料が充実し、鉄器生産や須恵器生産などの手工業に関わる住居域が7世紀中頃まで継続する大きな集落として注目される。また、南部の牛頸山山麓では、牛頸須恵器窯跡が6世紀中頃から操業を開始する。上園遺跡は同時期の集落だが、ロクロピットの存在などから、牛頸窯開窯期の須恵器製作工人の集落と考えられている。須恵器生産は乙金窯跡、雉子ヶ尾窯跡、裏ノ田窯跡などが6世紀後半から操業するが、いずれも小規模で、短期間で操業を終える。

飛鳥時代になると、墳墓で注目すべきは福岡市博多区と本市の境にある今里不動古墳で、7世紀前半築造の大型円墳であり、御笠川右岸地域の盟主墳とされる。また、牛頸須恵器窯跡では生産の一つのピークを迎え、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、惣利西遺跡などは須恵器工人の集落と考えられている。一方、野添窯跡や月ノ浦窯跡では初期瓦を生産しており那津官家比定地の一つ那珂遺跡に供給されたことが知られる。7世紀後半になると朝鮮半島で唐が介入する騒乱が起り、東アジア全体が動乱の時代を迎える。日本も白村江の戦いでの大敗を機に史上初の国際的な危機に直面する。これを受けて、664年から665年にかけて、水城・大野城が相次いで建設される。国内でも壬申の乱が起り、これを契機に律令体制が整備され、本格的な中央集権国家が形成されていく。

奈良時代になると、律令国家が整い、九州では大宰府を中心として各地の官衙遺跡と官道を整備

するなどして中央集権国家として支配体制が整えられる。仲島遺跡や井相田C遺跡では公的施設と考えられる掘立建物を中心とした遺構が確認されている。また、井相田C遺跡、谷川遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡、池田遺跡などで道路状遺構が確認されている。周辺の高畑遺跡は高畑廃寺あるいは那珂郡衙の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡では大規模な集落が出現し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や寺院、村落が展開した様子が窺える。また、市域では本堂遺跡で村落内寺院と考えられる遺構が確認され、薬師の森遺跡では小規模な集落ではあるが、須恵器窯造営に関連する遺構が確認されており須恵器窯の操業があったと考えられる。一方、牛頸須恵器窯跡では大宰府の整備拡充に伴い、窯の数が増加し、牛頸ダム周辺の窯跡群や、小田浦、ハセムシ等の多数の窯跡があり、供膳具を中心に大量生産が行われ活況を呈する。

平安時代前半期は総体的に遺跡が減少傾向にある。牛頸須恵器窯跡は9世紀中頃には操業を停止する。前代にみられた仲島遺跡なども9世紀代には消滅する。墳墓遺構として本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡、薬師の森遺跡で土壙墓が見つかった。平安時代も後半になると律令体制は崩壊し、武士が活躍する時代を迎える。大宰府政庁・鴻臚館の機能は中世都市「博多」に移る。塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡では輸入陶磁器を副葬する土壙墓が見つかり、本堂遺跡では「大日如来」銘の墨書土器や木製形代などの祭祀に係る遺物が出土している。集落は塚口遺跡、御笠の森遺跡、上園遺跡、宝松遺跡があり、また、薬師の森遺跡や天神田遺跡、谷川遺跡や下大利小水城周辺遺跡では瓦器の焼成遺構や関連する窯道具が多量に見つかり、瓦器生産が盛んに行われたことが窺える。

鎌倉～戦国期では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで当該期の遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12～14世紀の中世墓地が営まれ、溝に囲まれたピット群が広範に広がっており、有力な集団の存在を窺わせる。また、御笠の森遺跡では16～17世紀中頃にかけて多数の方形区画溝が展開し、中世末～近世初頭の集落像を考える上で注目される。この他、市域には戦国期の山城として乙金の唐山城、牛頸の不動城があるが、実態解明には至っていない。

江戸時代では御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、屏風田遺跡等で遺構・遺物が見つかり、御笠の森遺跡は『筑前国統風土記拾遺』に記載のある山田村の集落移転とその動態が一致し、注目される。また、後原遺跡では25次に及ぶ調査が実施され、集落域や集団墓地、中心的な神社など「拾遺」に記述のある白木原村の一部の景観復元が可能になりつつある。

また、後原遺跡や雑餉隈遺跡、宝松遺跡、大城山遺跡などでは明治期から大戦後にかけての本市固有の近世遺構が発掘調査の俎上に乗る機会が多くなり、大城山遺跡や後原遺跡では防空壕や米軍のベースキャンプ通りの痕跡が見つかるなど、近・現代遺跡の遺構についても本市の特徴的な歴史として、注視していく必要がある。

## Ⅲ. 森園遺跡第9・10次調査



## 1. はじめに

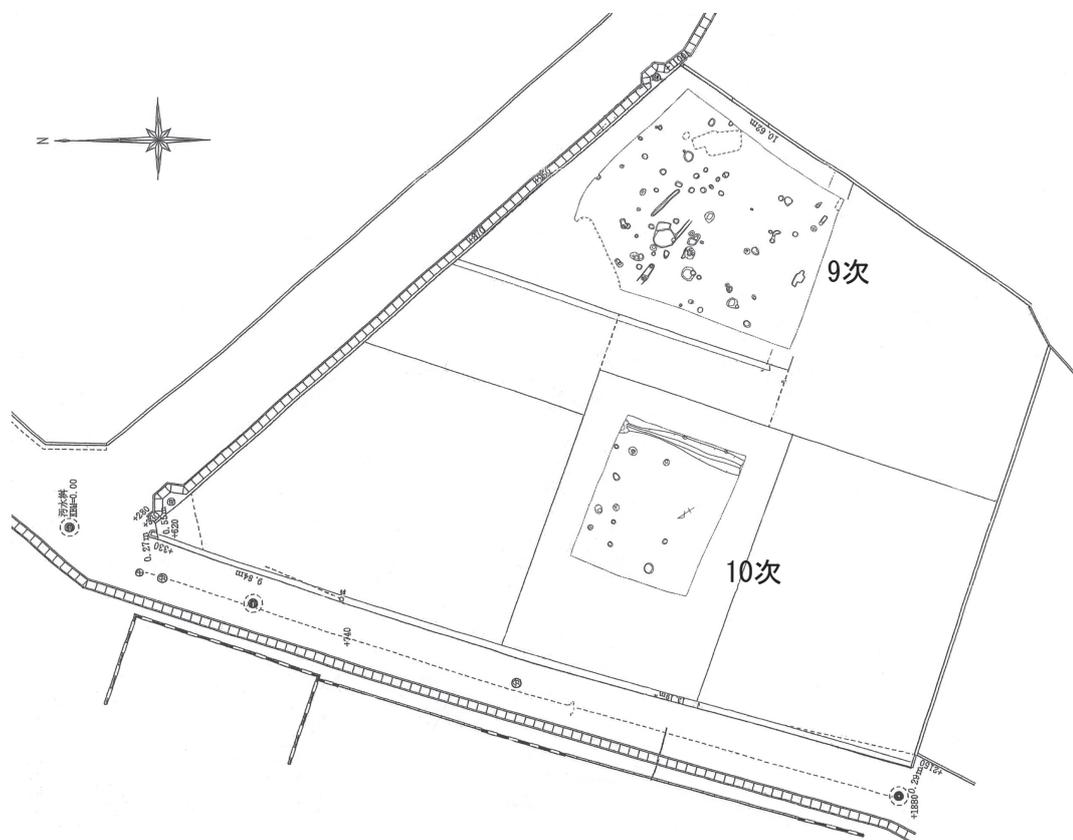
森園遺跡は大野城市川久保3丁目を中心に広がる遺跡で、乙金山西麓に延びる幅広の低丘陵上に立地する。小さな谷を一つ挟んだ南側に並行して細く延びる丘陵先端部には、弥生時代前期から古墳時代にかけて甕棺墓地や住居址群が展開する、中・寺尾遺跡が立地する。

1950年代に九州電力福岡南変電所建設工事の際に遺跡の存在が知られることとなった。その後、当所の増設工事や丘陵先端部にあたる変電所の北西部において開発が進み、適宜発掘調査を実施してきた。調査の結果、弥生時代の甕棺墓、石棺墓、土壙墓などの墓地、古墳時代の竪穴住居址群、平安時代の土壙墓などが検出され、遺跡の性格が徐々に明らかにされてきた。

調査は変電所内をⅠ区、北西の畑地をⅡ区とし、それぞれを細分した地点をA区・B区・・・として調査を実施したが、その細分した調査の順に調査次数とした。詳細は調査箇所図（第3図）並びに調査次数一覧表（第1表）にまとめた。

今回の第9次・10次調査は今までとは違い、変電所を挟んで反対側の南東側丘陵奥へ進んだところで実施した。周知の遺跡範囲のほぼ中央北寄りのところである。元々一宅地として利用されていた土地を分割して、戸建ての宅地として販売する開発行為で、試掘調査の結果に基づき、遺構の確認された二区画を調査対象としており、着手の時期は違うが一連の開発行為に伴う調査として経緯を一括して記述する。

9次調査は、所在地が大野城市川久保3丁目279-6他である。平成29年8月7日に埋蔵文化財の照会



第2図 森園遺跡9・10次調査位置図



が行われ、平成29年9月25日に試掘調査を実施したところ、現地表下72cmで遺構を確認している。地権者である古川静夫氏は居住する個人住宅建築を計画しており、敷地全体を80cm掘削する計画を提出された。計画通りであると、地下遺構に影響があるので、その保護について協議を進めたが、本人の計画通りで発掘届が提出された。それを受け、福岡県教育委員会から平成30年1月30日付で発掘調査の実施について指示がなされた。

調査は平成30年4月17日から表土剥ぎを開始した。排出土が場内に仮置きできず、場外へ持ち出すことにした為、表土除去に時間をとってしまった。表土剥ぎは4月26日に終了したが、連休が入り、天候も悪かったので、この間テントの設置やトイレの配置等を行い、5月8日から作業員を投入した。以降、遺構の検出と掘り下げを行い、5月11日の午後に高所作業車を使い全景の写真撮影を行った。その後遺構の断ち割り、図面作成、機材搬出等を行い、5月15日に現場での作業を終了した。調査面積は約80㎡である。

10次調査の所在地は川久保3丁目279-10である。地権者の岡本英希氏からの依頼により5月1日に試掘調査を実施したところ、現地表下70～85cmの所で遺構が確認された。地権者からは個人住宅を建築する相談があり、発掘調査の実施について協議を進めた。その後、5月2日付で発掘届が提出され、それを受けて、5月10日付で発掘調査を実施するよう福岡県教育委員会から指示があった。

現地での調査は5月21日から重機による表土剥ぎを開始した。今回は隣地に排出土を仮置できたので、比較的スムーズに作業が進められた。5月24日には作業員を投入したが、遺構検出面は試掘の結果とは反して、攪乱が大きく及び、遺構数も少なかったので、25日には調査区の清掃まで終えて全景写真の撮影、遺構平面図の作成まで終了した。5月28日に機材の撤収を行い、その後6月4・5日で埋戻しを行って、現場での作業を終えた。調査面積は約45㎡である。

第1表 森園遺跡調査地一覧

次数	地点	所在地	調査面積 (㎡)	調査期間	検出遺構等	文献	
I	A	川久保 3丁目225他	540	1985・4・4～5・2	竪穴住居（弥生4）、土坑、柵	26集	
	B-I・II・III		1270	1985・7・18～ 9・21	竪穴住居（弥生15・古墳5）、土墳墓（平安2） 丹塗土器、銅矛鏝型		
	B-IV・V・VI			1986・11・1～ 1987・2・14			
II	Bの一部	3丁目 1-13	1885	1986・6・5～8・25	竪穴住居1、甕棺墓、土墳墓、石棺墓、祭祀遺構	55集	
III	A	3丁目 1-15, 1-19	157	1986・11・27～ 12・27	甕棺墓7		
IV	Bの一部	3丁目 1-18	(1885)	1987・5・26～7・9	竪穴住居1、甕棺墓、土墳墓、石棺墓、祭祀遺構		
V	II	D	3丁目 1-3	420	1988・9・12～ 12・27	竪穴住居（弥生1）、井戸2、溝 祭祀溝（丹塗土器）	111集
VI		F	3丁目 1-5	242	1990・4・9～5・9	竪穴住居（弥生1）、土坑	155集
VII	E	3丁目 1-4	226	1990・5・14～ 5・24	土坑、溝（近世）		
VIII	C	3丁目 1-1, 1-2	270	1990・10・8～ 11・14	竪穴住居、甕棺墓、土坑、溝	未報告	
IX		3丁目 279-6	80	2018・4・17～ 5・15	ピット	本報告	
X		3丁目 279-10	45	2018・5・21～6・5	ピット	本報告	

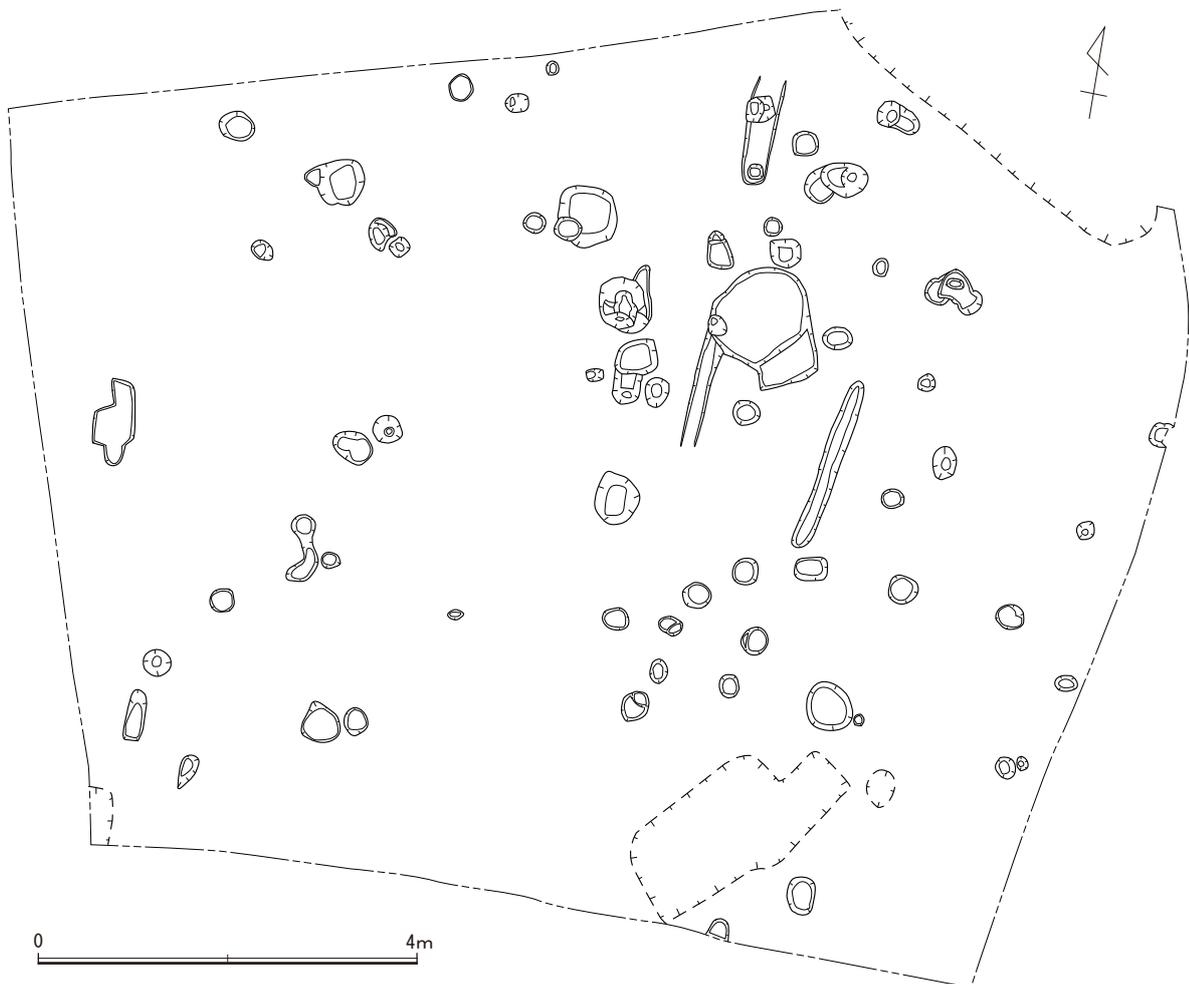
## 2. 第9次調査の成果

### (1). 調査の概要

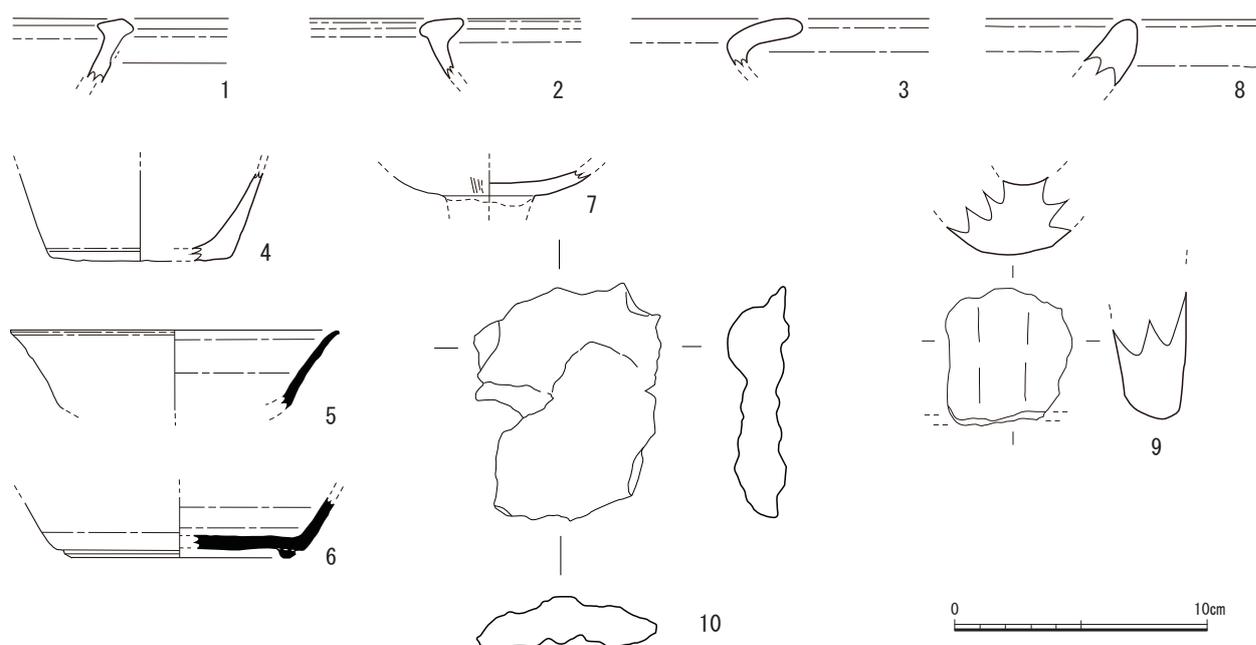
調査地はすでに真砂土による盛土等で造成され、区画割ができていた。南東部から中央へかけては真砂土の盛土がかなり厚くなされていたが、北西部は旧耕作土と思われる暗茶褐色土が遺構検出面上に20cm程度が堆積していた。遺構検出面は明るい赤橙色粘質土で、遺構の見極めは比較的容易であった。遺構検出面は北東方向へ下る緩斜面で、東側に接する道路で行われた下水道工事の立会時では道の東端から急激に斜面となっており、調査地は丘陵の東端に立地していることが分かる。検出した遺構はほとんどが小ピットで、形状が不整な浅い土坑状の物や細い溝状の遺構もいくつか検出した。遺物は弥生土器の細片が遺物の大半を占めるが、須恵器、土師器、黒色土器もピットを中心に出土した。また、鉄滓や轆の羽口も出土している。

### (2). 遺構と遺物

遺構としては述べてきたように、径20～30cm程の小ピットが殆どである。埋土や並びなど検討したが、建物等として纏まるものは見当たらなかった。遺跡の立地する面は西から東に傾斜しており、高地が削平されたためか、調査区の東半に比べ、西半は疎らである。



第4図 森園遺跡第9次調査遺構配置図 (1/80)



第5図 森園遺跡第9次調査出土遺物実測図 (1/3)

### 出土遺物 (図版2、第5図)

出土遺物は弥生土器の小片が大半で、須恵器・土師器や黒色土器等が僅かながら出土している。ここでは、辛うじて図化できたものについて記述する。

#### 弥生土器

甕 (1～4) 1～3は口縁部片、4は底部の破片資料である。1・2は口縁部が内側に嘴状に突き出す形態のものである。3は大きく外反する口縁部で端部を肥厚させる。いずれも黄橙色を呈し、器壁が荒れて調整は不明である。4は底部が若干外へ膨らむ形態のものである。外面は二次被熱を受けて赤変し、内面は黒色化している。

#### 須恵器

杯 (5・6) 5は外反する口縁部片で、器壁は薄く仕上げられ、端部が僅かに外反する。6は底部と口縁部の境に内側に跳ねる小高台が付くものである。

#### 土師器

高杯 (7) 脚を貼り付け部から欠く杯部の資料である。丸底で、外面は放射状にハケ目が認められる。内底は器壁が荒れているが、研磨の痕跡が残る。胎土は砂粒を含まず、精製されている。赤褐色を呈し、焼成は良好である。

埴輪 (8) 口唇部の小片である。胎土は粗く、2～5mm程の石英粒や長石粒を多く含む。被熱して赤褐色を呈する。

鞆羽口 (9) 基部の小片である。精製された粘土を使い、基底部及び外面はナデにより仕上げられる。高熱による風化が著しい。

鉄滓 (10) 6×5cm、厚さ1～2cmほどの方形に近い鉄片。若干、湾曲気味である。

### 3. 第10次調査の成果

#### (1). 調査の概要

調査地はすでにブロック擁壁で囲まれ、真砂土により90cm程盛土して宅地の形状を成していた。表土を除去したが客土の直下が遺構検出面という状態で、重機の爪痕が顕著に残っていた。

遺構検出面は9次調査と同様明るい赤橙色粘質土で、遺構の見極めは比較的容易であった。遺構検出時に調査区東辺に溝状の掘り込みを検出し、唯一の遺構と期待したが、土器片とともにグリ石等が混ざり、造成工事中の掘削と判明した。

#### (2). 遺構と遺物

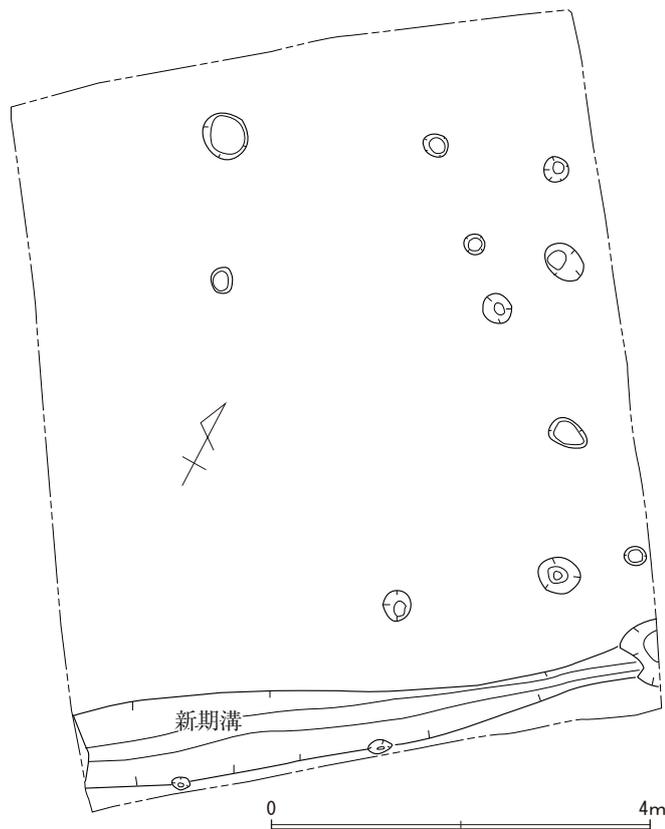
検出した遺構としては、9次調査と同様、小ピットが疎らに検出されたのみである。其々のピットからは弥生土器を主体に、須恵器や中世の土師器が細片ではあるが出土し、9次調査と同様であった。いずれも小片で図化に耐えず、唯一弥生土器の底部が図化できた。

#### 出土遺物（図版2、第7図）

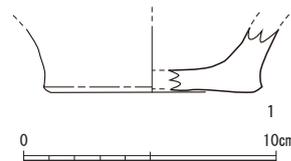
##### 弥生土器

甕 底部の小片である。外底はほぼ水平で、中央がやや窪む。

胎土に5mm程度の石英粒を含み、赤褐色を呈す。内底は黒変する。



第6図 森園遺跡第10次調査遺構配置図（1/80）



第7図 森園遺跡第10次調査出土遺物実測図（1/3）

### 4. まとめ

森園遺跡第9・10次の調査は隣接した個所で行い、当然ながら同様の遺構検出状況であった。調査面積は両方合わせて125㎡と狭く、森園遺跡の主体である弥生時代のピット群が遺跡の東南部にも広がっていることが確認されたのが今回調査の成果としてあげられよう。細部でみると、9次調査において、鞆羽口、埴塙片、鉄滓などが比較的限られた範囲で出土しており、時期は不明なもの、製鉄関連の遺構群が存在したことが窺える。

## IV. 天神田遺跡第2次調査



## 1. はじめに

調査対象地は、大野城市下大利4丁目789-6・7であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「天神田遺跡」の隣接地であったが、平成30年度に試掘調査を実施した結果、弥生時代から古代にかけての遺構・遺物を確認したので、包蔵地範囲を当該地まで拡げたものである。調査地周辺は小字名を「矢倉」といい、地形的にも平野に突き出した丘陵先端で、いかにも「物見櫓」がありそうな地形をしている。先端部西斜面で行った第1次調査では瓦器を生産した工房跡と思しき遺構が検出され、今回の2次調査でも関連する遺構が期待された。

平成30年2月、事業者から当該地の埋蔵文化財についての問い合わせがあり、4月23日に上記のとおり試掘調査を実施した結果、遺構・遺物を検出したので、さっそく協議を開始した。

事業者は当該地に個人住宅を建築する計画であり、住宅の基礎部分の工法については地盤強化の杭を複数本打設する計画書を提出された。計画どおりに工事が施工されると埋蔵文化財が損壊されるため、工事計画図を基に文化財が影響を受ける範囲において発掘調査を実施することで事業者と協議が整った。事業者から保護法93条に基づく届け出が福岡県教育委員会あてに提出され、それを受けて平成30年5月2日付で、福岡県教育委員会から発掘調査の指示が出された。

合わせて、埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が大野城市教育委員会へ提出されたので、これらを受けて大野城市教育委員会が主体となり発掘調査を実施した。調査期間は5月15日～6月12日までで、調査実施面積は約60㎡である。

調査区が狭小なので、2回に分けて表土剥ぎを行い、排土を場外へ持ち出すことにしたが、排土の搬出経路もまた狭小で、多くの時間・経費を費やした。



第8図 天神田遺跡調査位置図 (1/2,000)

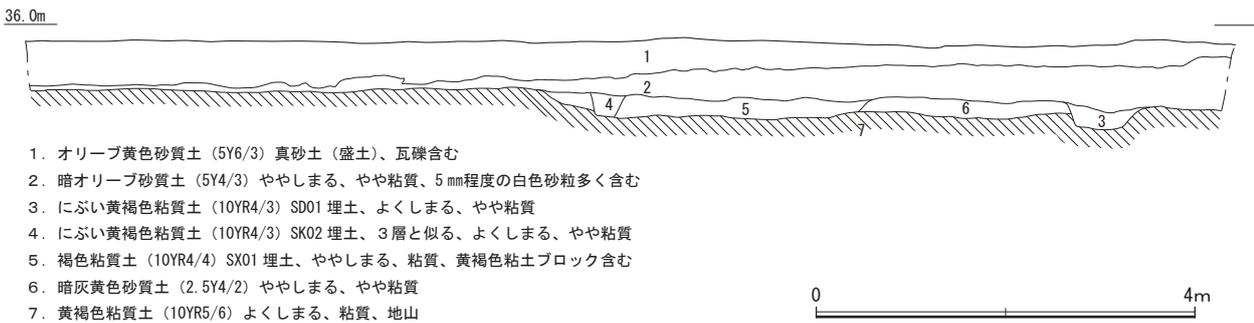
## 2. 調査の成果

### (1). 調査の概要

天神田遺跡は、牛頸山から北に向かって派生する八つ手状に開析の進んだ丘陵が平野と接する先端部分に位置しており、標高35m前後を測る。調査地は丘陵の西側斜面にあるが、第1次調査区の立地する丘陵が一旦窄まり、小さな谷地形を挟んでもう一度張り出す部分にあたる。また、周辺は造成時に、須恵器窯の断面が崖面に覗いていたといい、小谷が入り組み須恵器窯の立地に好適な地形をしていたと思われる。

発掘調査は、調査地の敷地面積が狭く、重機の動きもままならない状態であったので、表土除去を一度に行えず、調査区を東西に分割して行った。遺構検出面は現地表下50～70cmで黄褐色粘質土を確認し、この上面で遺構の確認を行った。調査区南壁の基本層序は下図（第9図）のとおり、東半は真砂土や瓦礫を含む新期の攪乱が遺構検出面まで削平を受けていることが分かる。

遺構は溝状遺構、大・小土坑のほか、複数のピットを検出した。また、遺物は、土師器、須恵器、陶磁器が出土した。

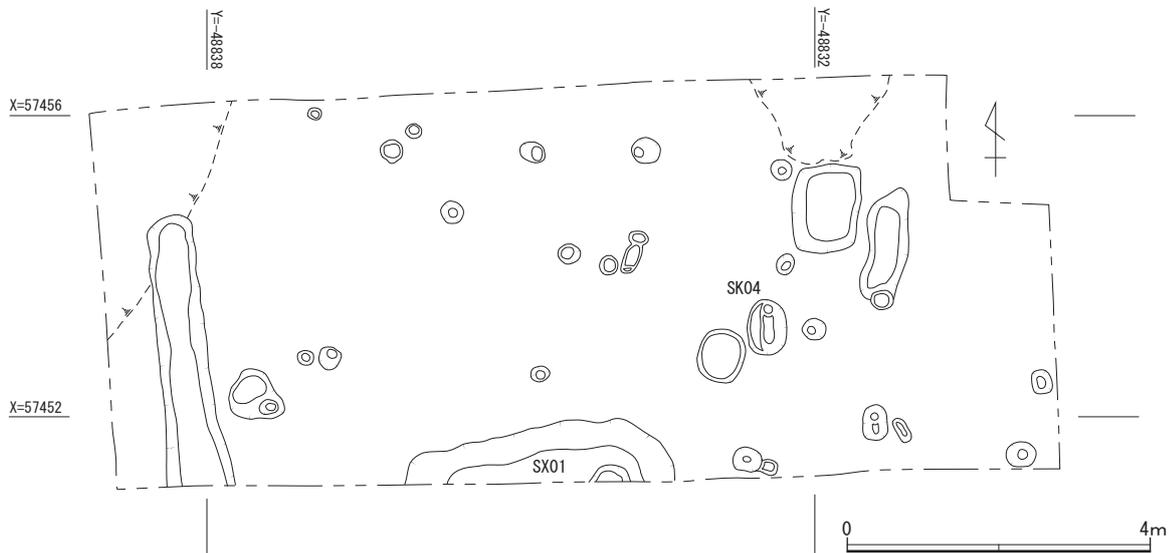


第9図 天神田遺跡調査区南壁土層図 (1/80)

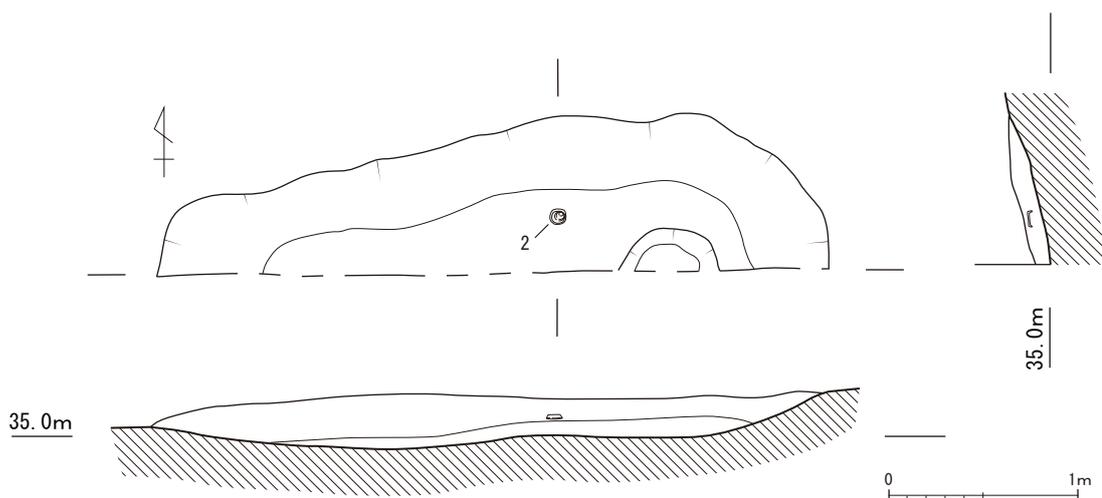
### (2). 遺構と遺物

#### SX01 (図版4、第11図)

調査区南端で検出した遺構である。遺構の南半は調査区外へ延び、全様を知らないが、東西に軸



第10図 天神田遺跡遺構配置図 (1/100)

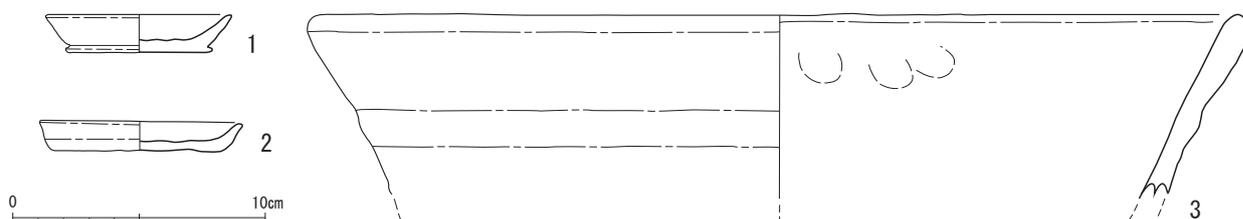


第11図 天神田遺跡 SX01実測図 (1/40)

をとる隅丸長方形に近い平面形を呈すると思われる。長さ3.5mを測り、深さ30cmと浅い。

### 出土遺物 (図版5、第12図)

土師器 (1・2) 小皿で、いずれも底部糸切である。1は体部は直線的に開き、口縁端部はやや尖る。全体を回転ナデで仕上げ、内底部には指頭痕が明瞭に残る。口径7.2cm、底径5.8cm、器高1.5cm



第12図 天神田遺跡 SX01出土遺物実測図 (1/3)

に復元できる。2は完形品で体部は短く伸び、口縁端部は丸く収める。回転ナデにより仕上げられる。口径8cm、底径6.7cm、器高1.3cmを測る。

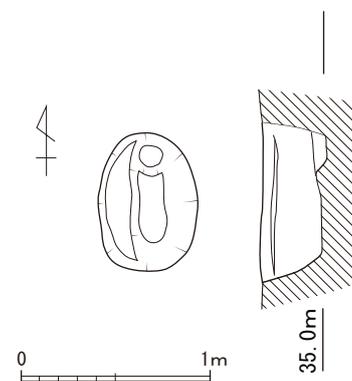
土師質土器 (3) 捏鉢の底部を欠く資料である。平底の底部から直線的に開く体部を持つものと推測される。口縁部はやや肥厚し、端部は丸くおさめる。内外とも器壁が荒れ、調整不明である。

### SK04 (第13図)

調査区の東側に位置し、長さ70cm、幅50cmの楕円形状のプランを呈する。西壁には検出面から8cmの深さでテラスがあり、2段掘り状の横断面を成す。土坑底の北側には径20cm、深さ8cmのピットが掘り込まれている。埋土は暗褐色土で、須恵器等が出土した。

### 出土遺物 (図版5、第14図)

須恵器 (4~6) 4は杯蓋。器高は2.2cmを測る。口縁端部は短く垂下する。内外とも回転ナデ。内面に降灰が見られることから逆位焼成である。5は杯身。底部端に低く潰れた高台が付く。内外



第13図 天神田遺跡 SK04実測図 (1/40)

とも回転ナデ。6は皿で、口径13.5cm、底径10.7cm、器高1.2cmに復元できる。体部は大きく開き、口縁端部は丸く収める。内外とも回転ナデ。

### その他の出土遺物（図版5、第15図）

ここでは遺構検出時に出土した遺物について記述する。

須恵器（7～10）7・8は杯蓋。7は天井部にボタン状のつまみがつく。外面はヘラ切り後ナデ、内面は回転ナデ。8は扁平な器形である。口縁端部は僅かに垂下する。内外とも回転ナデ。復元口径14.2cmを測る。9・10は杯身。9は体部が直線的に開き、口縁端部は丸く収める。内外とも回転ナデ。復元口径15.2cmを測る。10は底部で、復元高台径8.8cmを測る。底部と体部の境は明瞭で、その内側に低い高台が付く。内外とも回転ナデ。

## 3. まとめ

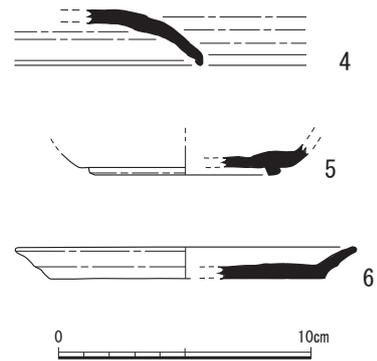
今回の調査では、古代・中世の遺構を確認した。SK04からは8世紀後半代の遺物が出土した。その他の小土坑やピットからも小片ながら同時期の須恵器が出土していることから、当該期の遺構の可能性が想定できるが、調査区が狭小なこともあり、その性格を明らかにできなかった。周辺では調査地の東麓に位置する谷川遺跡では、水城西門から鴻臚館へ延びる官道（西門ルート）が確認されている。また、北側に位置する天神田遺跡1次調査地点において、8世紀後半を主体とする土器が大量に出土しており、本丘陵部に見張りの役割を果たす施設が推定されている。（澤田2017）。今回出土した遺物も当該期における何らかの活動を示すものと言えるだろう。

中世の遺構としてはSX01がある。埋土中から完形の土師器皿が1点出土した（第12図2）。これは山本信夫氏による大宰府の土師器編年（山本1990）に照らすと、XIX期にあたり13世紀後葉から14世紀前葉の所産と推測される。第1次調査では11世紀末～12世紀前半頃の瓦器焼成遺構が検出されているものの、それ以降の人的活動を示す遺構は確認されていない。今回の調査で、その性格は不明ながら、1次調査の瓦器生産以降も何らかの土地利用がなされたのは事実であり、今回調査の一つの成果と言えよう。今後、周辺調査の進展に際し再検討をすることで今回調査地の性格や役割についてより鮮明になるものと思われる。

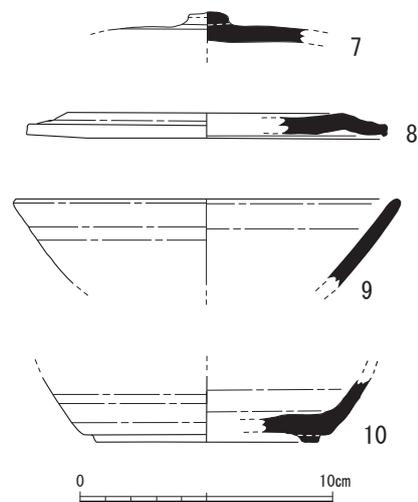
### 参考文献

澤田康夫編 2017『天神田遺跡1』大野城市文化財調査報告書第149集 大野城市教育委員会

山本信夫 1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究に寄せて—」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会



第14図 天神田遺跡 SK04  
出土遺物実測図（1/3）



第15図 天神田遺跡  
その他の出土遺物実測図（1/3）

# V. 御笠の森遺跡第19次調査



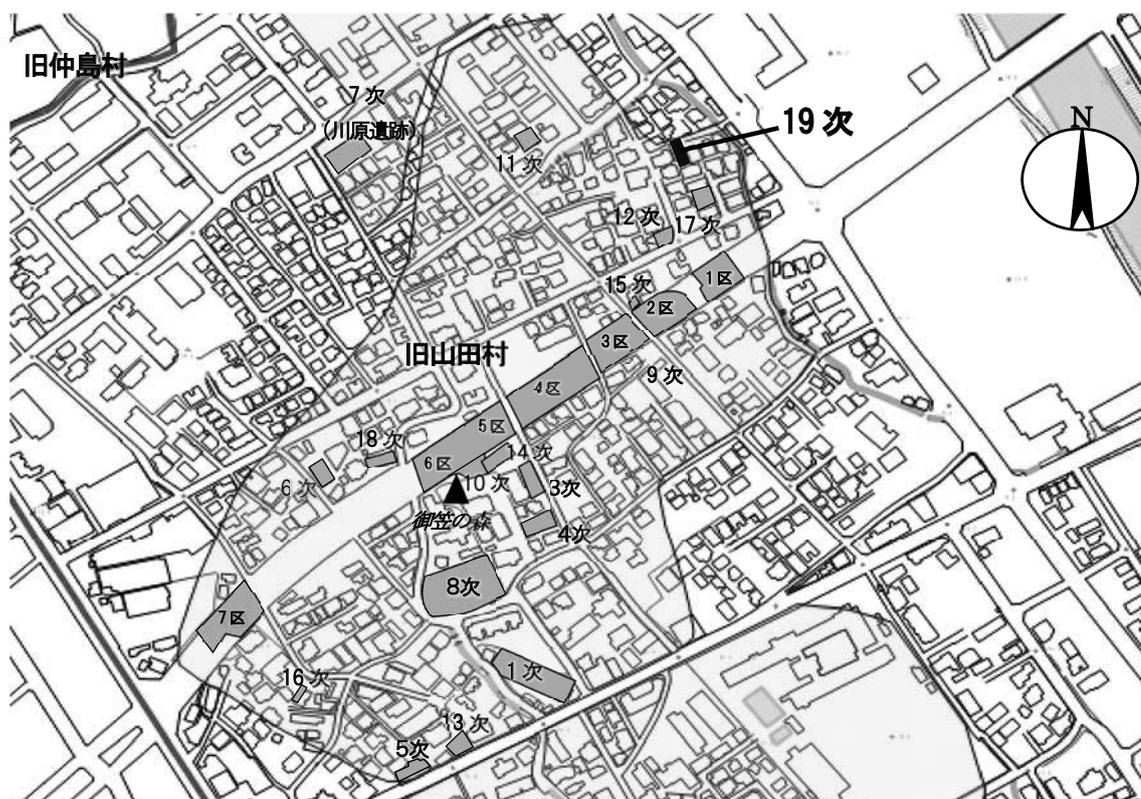
## 1. はじめに

調査対象地は大野城市山田3丁目180番4・5、178番3・5であり、周知の埋蔵文化財包蔵地「御笠の森遺跡」にあたる。

令和元年7月17日、事業者から対象地の埋蔵文化財に関する問い合わせがあった。事業者は当該地に個人住宅を建設する予定であり、計画通りに工事が施工されると遺跡が破壊されるため、事業者との協議を重ねた。協議の結果、遺跡保護は設計上困難であることから、遺跡が破壊される部分について発掘調査が必要と判断された。

事業者から造成・建設計画図面を添えて93条に基づく届出が提出され、福岡県教育委員会から令和元年7月23日付で発掘調査の指示が出された。また、令和元年7月30日付で埋蔵文化財発掘調査の依頼書・承諾書が市に提出された。これらを受け、発掘調査は令和元年度、整理・報告書作成は令和2年度に実施する旨、協議書を締結し、年度ごとに委託契約を締結し事業を実施した。

調査面積は、約66㎡である。発掘調査は、令和元年8月19日～令和元年9月13日まで現地で実施し、令和2年度に整理作業及び報告書作成を実施した。なお発掘調査及び整理作業は国庫補助事業として実施した。



第16図 御笠の森遺跡調査位置図 (1/5,000)

第2表 御笠の森遺跡調査地一覧

名称	調査時名称	地番	調査期間	調査面積 (㎡)	内容	備考
御笠ノ森	御笠ノ森	山田2丁目 235-1	1988.4	552	掘立柱建物3棟	福岡県教育委員会 県文化財調査報告書 第88集
欠番						
御笠の森遺跡第3次調査	御笠の森遺跡	山田2丁目 227-1	1989.6～ 1989.10	300	ピット・土坑多数（平安・ 鎌倉）、溝跡（江戸）	大野城市文化財調査 報告書第103集
御笠の森遺跡第4次調査	〃	山田2丁目 227-2	1990.6～ 1990.7	529	土坑（鎌倉）、溝跡（江戸）	未報告
御笠の森遺跡第5次調査	〃	山田2丁目 484・3・5	1991.4	238	掘立柱建物1棟	大野城市文化財調査 報告書第103集
御笠の森遺跡第6次調査	〃	山田2丁目 505-13	1993.11	150	溝跡、土坑（中世）	
川原遺跡（遺跡名変更）	御笠の森遺跡 第7次調査	山田1丁目 520-1	1998.9～ 1998.11	359	溝跡、土坑（弥生・古墳）	未報告
御笠の森遺跡第8次調査	同左	山田2丁目 232-23	1999.4～ 2000.1	1767	竪穴住居（奈良）、土坑、 ピット、溝跡（江戸）	未報告
御笠の森遺跡第9次調査	〃	山田2・3 丁目	2001.10～ 2004.2	5152	掘立柱建物跡、井戸、土坑、 溝跡（弥生～江戸）	大野城市文化財調査 報告書第63・65集
御笠の森遺跡第10次調査	〃	山田2丁目 228-1	2002.11～ 2002.12	98	掘立柱建物跡、井戸、土坑 （中世）	大野城市文化財調査 報告書第79集
御笠の森遺跡第11次調査	〃	山田2丁目 173-5	2004.12～ 2005.1	70	溝跡、土坑（古墳）	大野城市文化財調査 報告書第134集
御笠の森遺跡第12次調査	〃	山田2丁目 184-14・ 16	2010.5～ 2010.6	69	溝跡、ピット （室町～江戸）	
御笠の森遺跡第13次調査	〃	山田2丁目 495-1	2011.11.14 ～ 2011.12.26	175.5	土坑、ピット	
御笠の森遺跡第14次調査	〃	山田2丁目 227-4他	2013.9.7～ 2014.1.7	204	溝跡（中世・近世） 土坑・ピット他（中世）	大野城市文化財調査 報告書第125集
御笠の森遺跡第15次調査	〃	山田3丁目 201-17	2013.9.27 ～ 2013.10.26	100	井戸（中世）、土坑 ピット	大野城市文化財調査 報告書第134集
御笠の森遺跡第16次調査	〃	山田2丁目 561-5、562-2 の一部	2014.4.7～ 2014.5.15	86	溝跡、土坑他（中世）	
御笠の森遺跡第17次調査	〃	山田3丁目 181-4	2014.9.17 ～ 2014.10.8	67	掘立柱建物（中世） ピット	
御笠の森遺跡第18次調査	〃	山田2丁目 504-2	2015.6.10 ～ 2015.7.31	144	溝跡（古代）、ピット	大野城市文化財調査 報告書第153集
御笠の森遺跡第19次調査	〃	山田3丁目 180-4・5 178-3・5	2019.8.19 ～ 2019.9.13	66	土坑 ピット（古代、中世）	<b>本報告</b>

## 2. 調査の成果

### (1) 調査の概要

御笠の森遺跡は御笠川左岸の沖積平野上に立地し、大野城市山田2・3丁目に所在する。遺跡地とその周辺域は、昭和20年代までは水田が広がっていたが、現在は宅地化が進んでいる。本遺跡は「筑前国続風土記拾遺」に記された旧山田村と考えられ、中世から近世にかけて方形区画溝を持つ集落が展開する遺跡である。今回報告するのは第19次調査の結果である。第19次調査地は山田3丁目180番4・5、178番3・5に所在する。周辺を見てみると、第19次調査地から西に約100mには第11次調査地が所在し、南東に約75mには第17次調査地、南西に約60mには第12次調査地が所在する。発掘調査は地表下約160cmで遺構面を確認した。遺構は、土坑3基と複数のピットを確認した。遺物は土師器・須恵器等が出土した。

### (2) 遺構と遺物

#### ①土坑

##### SK01 (図版7、第18図)

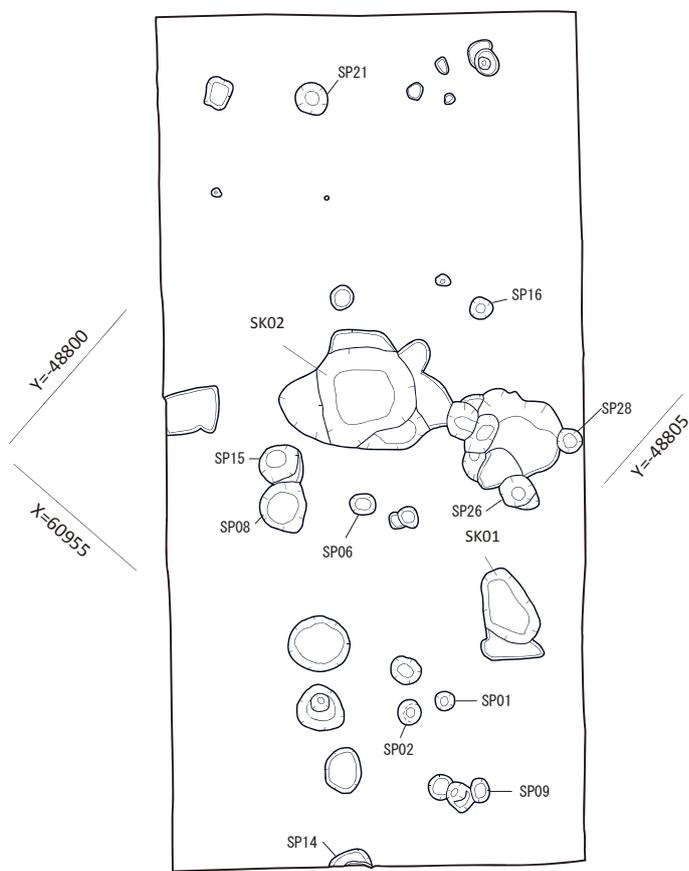
調査区南東部で検出した。長さ85cm、幅55cmを測り、楕円形を呈する。深さは33cmを測る。埋土は黒色土であった。遺物は土師器の甕の口縁部片の他、図化に耐えないが、須恵器片、土師器の小皿片、器種不明の土師器片が出土した。

##### 出土遺物 (図版8、第20図)

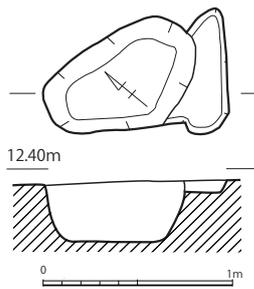
土師器(1)甕の口縁部片である。口縁部と頸部が残る。外面の口縁部から頸部にかけて成形時の指頭痕が残る。外面の口縁部はヨコナデ、頸部から体部にかけての外面はハケメ調整される。内面の口縁部はヨコナデ、頸部はケズリを施す。

##### SK02 (図版7、第19図)

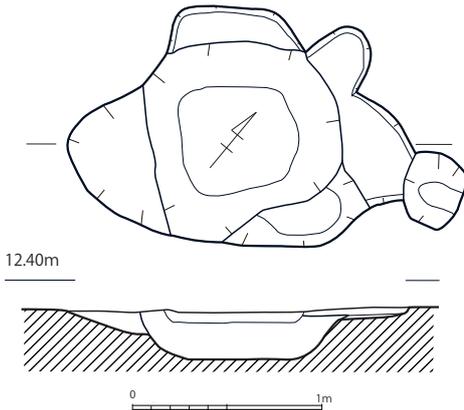
調査区中央部で検出した。最大長



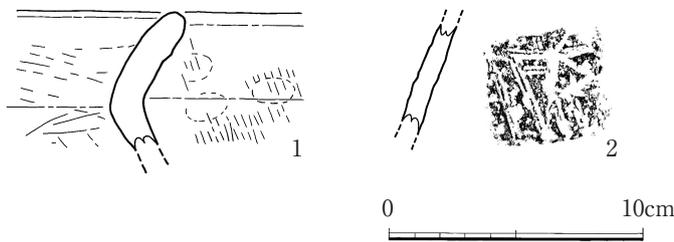
第17図 御笠の森遺跡遺構配置図 (1/80)



第18図 御笠の森遺跡 SK01実測図  
(1/40)



第19図 御笠の森遺跡 SK02実測図  
(1/40)



第20図 御笠の森遺跡 SK01・02出土遺物実測図  
(1/3)

約180cm、最大幅約125cm、深さ約27cmを測る。不定形を呈し、東部はSP27に切られる。埋土は茶色土で、遺物は縄文土器片が1点埋土中から出土した。

### 出土遺物 (図版8、第20図)

縄文土器 (2) 器種不明の土器片である。外面に山状の条痕が刻まれる。残存器高は4.3cmを測る。胎土は微細な白色粒を含むがやや粗い。焼成は良く、色調は内面が浅黄橙色、外面が橙色である。

### ②ピット

調査区全体で大小30基を検出した。比較的南側に多く集中している。調査区が狭小のため、調査区内で建物として復元できるものは無かったが、調査区南部で検出したピットは、埋土断ち割りの状況を見ると、柱痕の形跡が確認でき、建物の一部を成すことは確認できる。

### 出土遺物 (図版8、第21図)

#### 土師器 (3～19)

小皿 (3～13) 3は小片である。SP01出土。4は底部糸切りである。5は底部ヘラ切り。6は復元口径8.0cm、器高0.9cmを測る。SP06出土。7は復元口径8.0cm、器高1.3cmを測る。SP09出土。8～12は底部糸切りで、8は口縁部がわずかに丸みを帯びる。復元口径8.4cm、器高0.9cmを測る。9は復元口径8.6cm、器高1.0cmを測る。SP28出土。

10は復元口径9.0cm、器高0.8cmを測る。SP02出土。11は復元口径9.0cm、器高1.05cmを測る。12は復元口径9.2cm、器高1.3cmを測る。SP16出土。13は底部ヘラ切りで、復元口径9.4cm、器高1.5cmを測る。4・5・8・11・13はSP26から出土した。

杯 (14～18) 14～16は口縁部片である。14がSP01、15がSP21、16がSP14から出土。17は復元口径14.0cm、器高2.5cm。口縁端部がわずかに外反する。内外面はミガキ、外面底部はヘラ削りする。SP15出土。18は復元口径13.1cm、器高3.0cmを測る。SP26から出土。

皿 (19) 底部である。摩滅して調整不明。SP26から出土。復元底径12.2cmを測る。

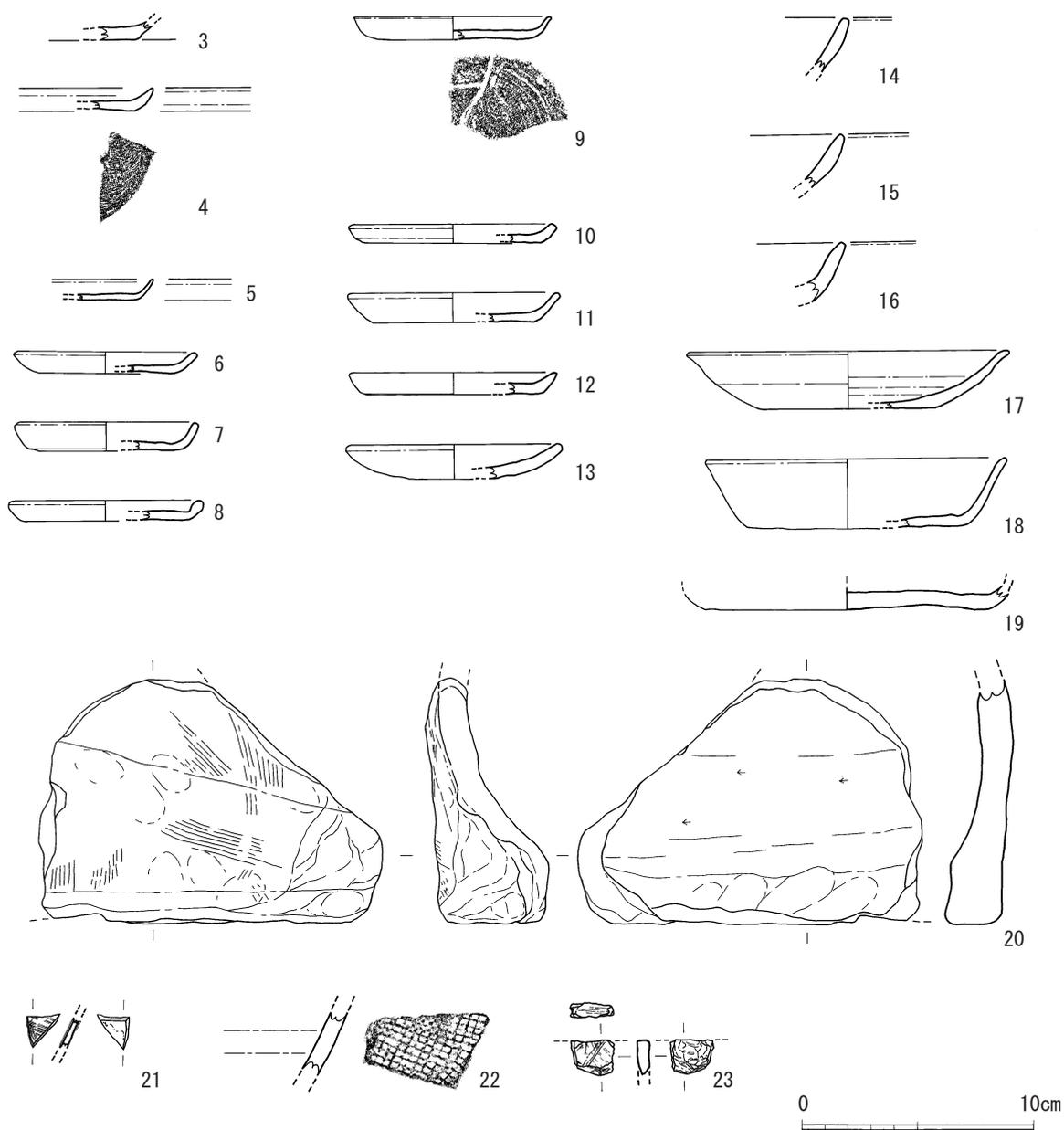
移動式竈 (20) 裾部片である。焚口部が残存し、裾底に煤が付着する。外面には成形時の指頭圧痕が残り、内面はケズリとナデ調整される。SP08から出土した。

青磁 (21) 内面にヘラによる施文と櫛描き雷文を有する。同安窯系青磁の小片と思われる。破片

資料の中位で施釉が止まる。SP16 から出土。

瓦質土器 (22) 甕の小片である。内面はヨコナデ、外面に格子目タタキを施す。SP02 から出土。

石製品 (23) 2面を加工する滑石の小片で、長さ 1.5cm、幅 1.85cm、厚さ 0.6cm、重さ 2.9 g を測るが用途不明である。SP09 出土。



第21図 御笠の森遺跡ピット出土遺物実測図 (1/3)

### 3. まとめ

本調査で検出した遺構についてみると、SK02では、縄文土器が1点出土している。土器1点のみの出土のため、SK02が縄文時代の遺構と断定はできないが、この時代において人の活動が確認できる。SK01では須恵器片等に混じり、図化に耐えないが土師器の小皿が出土している。摩滅により調整技法が不明瞭だが、小皿の出土から10世紀半ばを遡ることは無い。御笠の森遺跡では、これまでの調査で9世紀から11世紀前半までの遺構は確認されておらず、SK01周辺のピット出土遺物は11世紀後半から13世紀後半にかけてのものであることから、SK01は11世紀後半から13世紀後半にかけての遺構と判断した。ピットは散漫する状況が確認できたが、建物として復元できるものは無かった。出土遺物は一部奈良時代の遺物が混じるが、山本信夫氏の大宰府の土師器編年（山本1990）の11世紀後半から13世紀後半にかけての法量、技法におおよそ一致する土師器小皿や杯が出土しており、ピットの多くは11世紀後半から13世紀後半にかけてのものと思われる。

周辺の調査地を見てみると、第19次調査区から南東に約75mに位置する第17次調査区や西に約100mに位置する第11次調査区では遺構やピットが散漫することが判明している。両地点とも、御笠の森遺跡の特徴である、連続する方形区画溝から外れた場所に位置しており、御笠の森遺跡の北側の縁辺部と考えられる。本調査区においても、第11次調査区や第17次調査区と同様な状況を確認した。

第19次調査区は調査範囲が極めて狭く、遺構の詳しい性格は不明である。今後、本調査地周辺の調査がより進展することで、御笠の森遺跡の北側縁辺部の様相が明らかになっていくと思われる。

#### 参考文献

山本信夫 1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究に寄せて—」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会

龍友紀・上田龍児 2016『御笠の森遺跡6』大野城市文化財調査報告書第134集 大野城市教育委員会

# 圖 版

